

井ルソン山天文臺の詩

(つ　　き)

かくて、一人々々、吾等は見た、

ウラニアに仕る者も、ヴルカンと働く人も。
暗黒の中に、美しい熱心が燃えて、

ドス黒い顔も輝やいて見えた。——平素は
盲目的に地上の勞働の、

憂鬱な機械的生活に没頭して
余りに永く、此の世の意義を忘れてゐたのに。

ホンの刹那の天空メロデイを、



METEOR TRAIL IN THE SOME FIELD WITH THE
GREAT ORION NEBULA

The bright streak on the left side of the photograph was caused by a meteor, or so-called shooting star, which happened to rush across the field while the exposure was being made. Photographed with the Bruce telescope, by Barnard

及びもつかぬ遠方に聞いたのだけれど、

其れは、日々の仕事に聖化と喜悅とを與へた。

こゝに、黒ずんだ眼、かわいた咽喉、

榮葉服、赤シャツ、機械油と汗とで

汚れ、まみれつゝ、人々は交る々々

淡暗い階段の脚下のまはりに集つて來て、

今、見たものの怪異を

順番を待つ次ぎの人々にさゝやく、――

まるで、レムブランドに畫かせたい圖だ。

見上げる頭上には、アーチ形の窓を通して

巨大な筒が天を仰ぎ、地上の齒車によつて

靜かに或る星を追ひつゝ動く。こゝに、

高く聳ゆる塔の側に立ん坊する魔の如く

イタリヤ人機械師は月たちを覗く、

かのイタリヤが發見した月々を。一人づつ順に攀ちて

アメリカ人、イギリス人、フランス人、オランダ人、

手さぐりしつゝ、宇宙の不思議を見る。夜なか頃、

人々が、時計調節のため觀測を休んだので、自分は、

ひとり、夜の靜寂の中を散歩した。

靜寂か？ かの淋しい高峯から聞える

とはの聲々。

脚下の深みを見下すと、

殆んど總ての光は今皆消えて

暗い全山は其の足場を失ひ、

天空を行く船のやうに行く。

四方から、海の如き轟きがきこえる。

松樹のうなりは、絶對平和の大汐小汐か、

地上の總ての惱みを超えて

あたかも子守り歌の如く、靜かに、穩かに、

宇宙の柔かな深い呼吸は

其の末子、人類の心に波うつ、

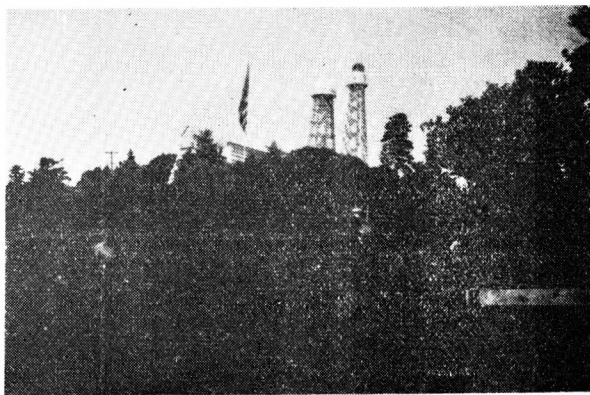
聞けば、この風神の聲は
請願、祈願となる、

おゝ汝、此の高峯に住む者よ、
天の神々の中に光りとして動く者よ、
吾等の生命を永遠の歌に變へる者よ、
眞理への此の暗黒界の戦ひを、

今、音樂に變じ得る者は無きや？
九マイルも山を攀ちて星に近づきつゝ、

光のための此の長き戦ひ、
人の魂の此のけなげな勝利——

美をもて之れに觸るゝ者なきや？
吾等はかつて戦争を歌つた



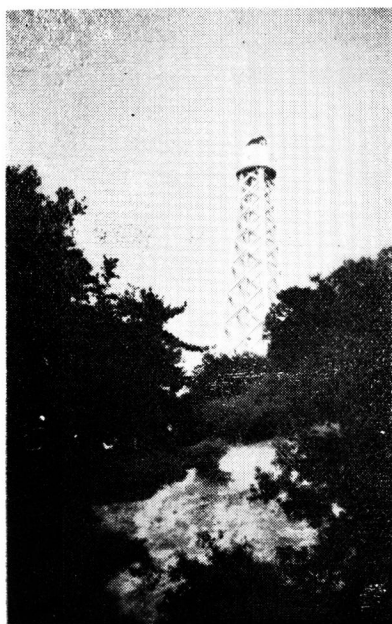
星條旗に飾られるキルソン山天文臺

盲目的な、血を逐ふ王者も
たえなる樂の音もて王位に進む、

さるに、より氣高き戦ひを歌はざるや？
光りを求め、しかも勝ち誇る勝利の夢だに無き
此等戰士のために歌はざるや？

沈黙の發見者、淋しき開拓者、

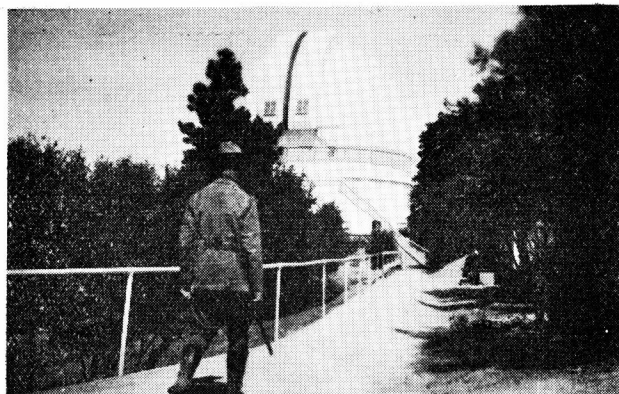
真理のための捕囚，追放者，殉教者
 時代から時代へ聖火を傳へた人々
 一步步々，夜を追ひつめた人々，
 年一年，星々の世界に，
 至高の法則と其の手引きを追ひ求むる人々のために
 又内部を探求し，岩をも破りて
 新しき世界を求め，
 更に其の内部に



ホテルより見たる高塔望遠鏡

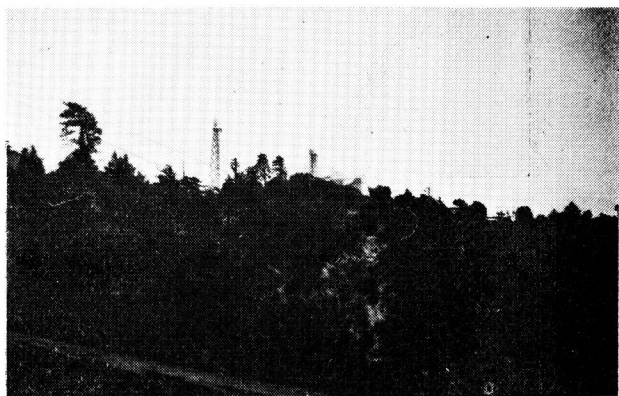
我が地の世界の基礎を作るため
 原子と電子が軌道をめぐる
 遊星系を発見した人々のために，
 一時，又次ぎの一時，
 此の法則界の自由を

人の世のために征服した人々のために、
夢を夢みる人、吾等が希望の建設者、



「百吋」ドームへの往來

傷の治癒者、縋者、
此の世を血で色ごらせた王者と異り、
かすかな燈火の静かな側で
昔しのヘルクレスの如く
なやむ小兒の救ひに、死と角力する人々のために、
此の法則の活ける宇宙に



キルソン山天文臺の遠景

最後の光明を與へ、

吾等の朽ちたる祭壇に再び

清けき黎明の光りを與へ、

かのルクレチウスの夢よりも惱ましき夢から

人の世を救ひて、

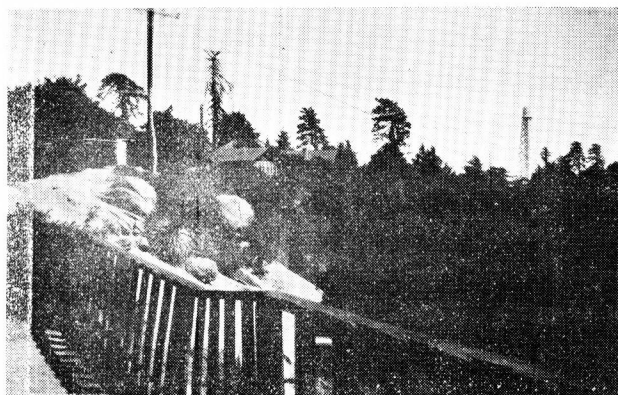
世界を導く大威力の姿に人を近づける人々のために
如何にして人々は之れを知るや？ たゞ

内部へ開きて、各人別々に、

生命の内部に人を導き、

知らざる永遠の神を見るまで、

知られざる生命に達するのみ。



キルソン山ホテルの露臺より

こゝに、吾が前に、光の如く動く者あり、——人と神の愛
すべて弱き者に力を與ふる者、

さゝやく、『此の不死の歌の巨火を持て………』

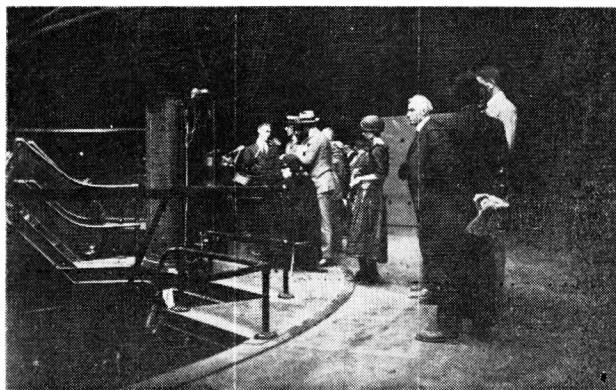
さゝやきは、自分でさへ、

之は愛を通じ、世の總ての智者が愚と笑ふとも

之は愛にのみよると思ひつゝおののいた。

如何なる槍の前にも我が胸を露出せよ、

愛のみを天空旅行の案内者とし、



「百時」ドーム内の参観者たち

清きプロメテウスの火を獲し人々のために歌ひ
 一人づつ、叫びながら降り行き、
 待つ人々の下へ、青春と喜悅に満ちて、——
 『此の光りを取りて、遠きに持ち行け、
 我が知り得ざる時代まで。
 我が到り得ざる新しき國まで』

(R.ノイエス)

カノン女史より來書

Star Cottage,
 4 Bond Street,
 Cambridge, Massachusetts.
 November 28, 1929

Dear Professor and Mrs. Yamamoto,

I often think of you in faraway Japan, and of the pleasant times we had when you were in our country. My dear sister passed into the Great Unknown last April, and I do miss her companionship very much. She often spoke of Japanese friends,